

「データの視覚化と視覚データのデータベース化」 特集号発刊に寄せて

牧之内 顕文†

まず、本特集号を編集するに至ったいきさつについて述べたい。2000年5月10～12日の3日間、九州大学箱崎キャンパス国際ホールで「IFIP TC2 WG2.6 Fifth Conference on Visual Database Systems (VDB 5)」が九州大学およびIFIPの共催で開催された。国際会議の成功は、1つは質の高い論文を多数の国々の研究者・技術者に投稿してもらうこと、第2に、会議への参加者も多数得ることである。私は、この国際会議のGeneral Chairとして、これら2つの点でこの会議をぜひ成功させたいと思った。

データを視覚化(Visualization)し、その意味が「見れば」分かるように表示することは、パソコンの普及により、一般の人々がユーザとして参加するようになった現在、非常に重要な課題である。特に、データベース分野ではこの視覚化は重要な研究テーマにもかかわらず、必ずしも脚光を浴びているとはいえない状況である。幸いにも、上記国際会議は、このテーマに的を絞った国際会議としてユニークである。そこで、この会議開催と軌を一にした「データの視覚化と視覚データのデータベース化」と題した特集号を情報処理学会論文誌TODの一環として発行し、国内での研究の現状を広く知らしめることができれば時宜にかなうと考えた。また、論文誌に論文を掲載する前に、同分野の研究・技術者が一堂に会し、議論し、情報を交換する場が与えられるならばその効果はより高まるであろう。そして、その場が国際会議の時期と重なれば、国内外の研究・技術者の交流が図れて、いわば「一石三鳥」ぐらいの価値が生じるのではないか。

そこで、情報処理学会のデータベースシステム研究会と電子情報通信学会のデータ工学研究会が合同で、国際会議の直前に国際会議が開催されるのと同じ場所で「データの視覚化と視覚データのデータベース化」特集の研究会を開催できないか両研究会の主査・委員長に相談をした。しかし、すでに前年度に決まった日程の都合上、情報処理学会データベースシステム研究会はその時期に研究会を開催するのは「困難である」

とのことであった。結局、データ工学研究会の主催団体であるデータ工学研究専門委員会の委員長である北川筑波大学教授がこの提案をご検討くださり、単独でも「やりましょう」とのご回答を得たしである。次に、異なる学会の研究会と本論文誌とを「どう結び付ける」かが課題となる。研究会に論文(査読はなし)を投稿する方々に、その論文をTOD特集号(査読あり)に投稿してもらうにはどうしたらよいか。そこで、データ工学研究専門委員会の一部の方々と本論文誌編集委員の一部の方々に本特集号の客員編集委員を委嘱し、査読委員の割り当て、査読結果の最終判定等の編集作業に参加してもらうと同時に、研究会に出席していただき、特集号に投稿を予定している論文を研究会発表時に積極的に批評・コメントをしていただくことにした。研究会発表と本論文誌への投稿はまったく独立なので、研究会発表論文は、研究会での批評・コメントを参考に、必要なら論文を修正・改良して新規に本特集号に投稿してもらうことにした。結局、データ工学研究会は5月9日に開催され、22本の論文が発表された。聴講者も多数あり、質疑応答も活発であった。22の発表論文のうち、12論文が本論文誌に投稿された。

6月20日の投稿締め切り日までに本論文誌特集号に投稿された論文は20本であった。したがって、そのうちの8本は研究会での発表なしに投稿されたことになる。その後の経過は以下のとおり。第1次査読で採録されたのは0、条件付き採録が13、不採録は7。不採録率は35%。条件付き採録となった論文については、修正後再度査読を行った。この第2次査読に基づく編集委員の最終判断結果は、12論文(すなわち、修正後投稿された論文すべて)が採録であった(1本は著者から撤回の申し出があった)。したがって、最終採択率は60%という結果になった。特集号編集委員長としては、研究会での審議により、論文の質を高め、その結果採択率を100%近くにしたいという思惑があったが、査読委員および編集委員の方々の厳正かつ公正な判定の結果このような採択率になった。

国際会議と研究会との同時開催および研究会と連携

†九州大学大学院システム情報科学研究所

した本論文誌特集号刊行は国際会議実行委員会、情報処理学会 TOD 論文誌編集委員会さらに電子情報通信学会データ工学研究専門委員会の 3 者のいわば合同企画であり、国際会議の成功、研究会の活性化、論文誌の多様化の 3 つの面で大いに効果があったと信じている。実際、国際会議については、IFIP2.6 ワーキンググループ委員長である Erich J. Neuhold から、'Thank you very much again for the excellent VDB 5. Even after the conference I have heard only good things about VDB 5 and its quality. May be you should thank again, also in the name of WG 2.6, all the people that contributed.' とのメッセージを受けている。

研究会には、実際に参加してみて、活発な意見交換があったことを確かめているし、また 5 月という通常は「狭間」の時期での開催にもかかわらず多数の論文発表があったことから見て、研究会にとってもこの企画は意義があったと思われる。ただし、本誌への貢献については、読者諸賢の今後の判断に待つよりほかないが、それなりの貢献を果たせるものと期待したい。

本特集号発行の経緯について、やや詳しくかつ正直に述べた。この企画実現については、本誌編集委員会、特に清木委員長およびデータ工学専門委員会北川委員長には大変お世話になりました。また、データ工学研究専門委員会の幹事である掛下佐賀大学助教授には、特集号編集委員になっていただき、データ工学専門委

員会との橋渡しとして大いに活躍していただいた。ここに深く感謝したい。

さらに、ご多忙中にもかかわらず本特集号の編集委員になっていただいた方々、特に、わざわざ福岡の地まで出向いてこれ、研究会で発言していただいた方々には学術振興の面でボランティア精神を発揮していただきました。本紙面をかりて、これらの方々にも心よりの感謝を表したい。

[データの視覚化と視覚データのデータベース化]
特集編集委員会

- 編集長
牧之内顕文（九大）
- 編集委員（順不同）
有川 正俊（東大）
有澤 博（横国大）
掛下 哲郎（佐賀大）
金森 吉成（群馬大）
北川 博之（筑波大）
清木 康（慶大）
増永 良文（お茶大）
西田 正吾（阪大）
西尾章治郎（阪大）
田中 克己（神戸大）
吉川 正俊（NAIST）